

# さいたま市初の女性救急救命士として

～自分を大切に。そして、周りの人も大切に～



認定救急救命士

つちや けいこ  
土屋 桂子 さん

## 【プロフィール】

日進北小学校、宮前中学校出身 / さいたま市桜消防署勤務 / 半年間の消防学校初任教育科卒業時に埼玉県知事賞受賞 / 1992年、救急隊員の資格を取得。初の女性救急隊員として週2回救急車に乗り始める / 1993年、専属救急隊に配属（日勤帯のみ） / 1995年、労働基準法改正により24時間勤務となる / 2001年、救急救命士の資格を取得 / 2007年、薬剤投与可能な救急救命士に認定

## 女性救急救命士として

小さい頃から救急車に興味はありましたが、特に母親が救急車のお世話になってから、より関心が高くなりました。母が倒れた時、「自分にも、心肺蘇生法ができれば・・・」と思いました。

就職について考える時期に、知り合いの消防署関係の人から、大宮市消防本部で女性を募集していることを聞き、応募しました。その頃の消防署は男性中心の世界であり、私は事務職として勤務することになりました。現場で働きたいと思っていましたが、女性は24時間勤務できないという法律の規制があり、救急の仕事はできませんでした。

しかし、その後、他の自治体での女性登用の影響もあり、上司の理解もあって、徐々に女性が救急隊員として働ける環境が整っていき、平成7年4月、私は、念願の女性救急隊員となることができました。

## 市民のために働いている

女性救急救命士になるまでも大変でしたが、なってからも苦労もあり大変なこともありました。他

の消防官から「女性で大丈夫なのか。」などの声がたくさん聞こえてきました。くやしい思いをしましたが、「私は市民のために働いているんだ。」という強い気持ちを持ち続け、頑張りました。

救急時に、ある女性から、「女性の救急隊員がいてくれて、安心しました。」と笑顔で声をかけてもらい、より頑張っていこうという勇気が湧いてきました。また、同僚からの「救急時に女性がいると現場が優しい感じになります。女性への救急対応の時はとても助かります。」との声も大きな励みとなりました。

## 人生の中で、一番きれいな涙

以前、瀕死の状態の赤ちゃんを助けたことがありました。その時は、赤ちゃんに血の気は無く、「もうだめか。」と思いましたが、その後の処置がうまくいき、幸いにも回復しました。

その後、病院から「元気になった赤ちゃんを見に来ませんか。」と誘われて行ってみると、そこには、ほおが赤くなって看護師さんに抱かれている元気な赤ちゃんの姿がありました。自然に涙が溢れてきました。その時流した涙は、「これまでの人生の中で、一番きれいな涙だな。」と思えました。

## 日々、勉強を欠かさない

自分は「人の命を救っているんだ。人の命に関わっているんだ。」という強い気持ちをいつももち、救命のための知識や技術を高めるように、日々、勉強を欠かさないようにしています。病院はそれぞれ専門分野に分かれていて、ふだんは、患者さんは分野を選んで、診てもらうことができます。しかし、救急時の患者さんはそうはいきません。救急救命士は、どういう患者さんに対応するのか分かりませんので、大変ではありますが、やりがいがあります。16年経った今でも、常に新鮮な気持ちで救急活動に従事しています。

また、人とかかわる仕事、市民とかかわる仕事なので、自らの人間性も高めていかなければならないと強く感じています。

## 自分を大切に。そして、周りの人も大切に。

当たり前のことですが、死んでしまったら、もう二度と命は戻ってきません。私たちは、死んでしまった後、残された人たちの気持ちをもっともっと考えなければならないと思います。生きたくても病気や事故で死んでしまう人をたくさん見てきました。今の若い人たちには、健康の大切さ、命の大切さ、重みを分かって欲しいと思います。

小・中学生のみなさん、自分のことを大切にしてください。そうすれば、周りの人も大切に思う気持ちがきっともてると思います。自分を大切に、そして周りの人も大切に学校生活を送ることを心から願っています。